

「私、泣いてもいいんですね・・・」 ～福島に再びの春は巡るか…～

原木とし子（非核の会京都事務局員）

10月10日～12日の3日間、「さよなら原発・長岡京市民の会」のメンバーとともに今年も南相馬市を訪れた。実際の行動は1日半と、短い時間ではあったが昨年とはどこか違った「福島」を感じた。確かに浜通りの国道6号線は全面開通しているし、新しい建築物も増えている。高速道路も東北道と常磐道がつながり、物流輸送がスムーズにいつているとのことだ。（しかし、放射能が高線量のため、駐停車禁止・バイク乗り入れ禁止という区間が何力所がある。）しかし、その「見える（見せかけの）復興」の陰に隠された被災者の苦悩は深く、出会った人たちから伺った話には今も哀しみ、憤りで胸が締め付けられる。原発事故は被災という共通性を持ちながら、今、一人一人の心と暮らしに個別の深刻さを呈しているのだ。私たちが今まで経験したことのない、過去も現在も未来をも奪ってしまう破滅的な事故であることが実感された。

政府の「2017年3月までに避難指示を解除する」という、期限を決めた「強制帰還政策」が強引に押し進められているのを目の当たりにして、また新たな怒りが湧いてきた。ともかく、国の基準値まで放射線量を下げる除染作業に今、全国から多くの人がかき集められている。地元の人口の何倍もの作業員が投入され、南相馬の国道6号線は朝から晩までダンプカーがひっきりなしに列を連ねて走っている。未だ手づかすの田畑の除染作業が始まっている。土の表面を5センチ削り取った後、さらに50センチ掘り返し上下の土を入れ替え、真砂土を大量に敷くらしい。しかし、そこに稲などの作付けは出来ないそうだ。保水性のない田畑に作物は育たない。作業する人から「こんな意味のないことをやってどうするのだ」という声が聞かれるそうだ。また、除染作業に対する研修も指導もないまま、危険な作業をやらされている人たちも多いと聞く。作業着のままのコンビニや飲食店への出入には、汚染の拡散や治安の面でも不安が大きいと地元の人が話された。（コンビニのごみ箱に作業に使った手袋やタオルなどがよく捨てられているそうだ。）若い女性の夜間の外出に不安があるとのこと。また、最近は女性の作業員をよく見かけるといふ。圧倒的に男性が多い作業員宿舎での女性作業員への配慮などは全くないらしい。女性は宿舎の共同浴場などの使用も出来ないという。女性作業員の身の安全は守られているだろうか気になるところだ。社会の底辺労働者として危険業務に晒され、低賃金（7次下請けになると中間業者にピンハネされて、国の危険業務手当の3万8千円の日給が何と1万3千円しか支払われていない。）で使い捨てられている状況に、事故の収束や復興などほど遠いと感じてしまう。次から次へと新たな問題を生み出し深刻な事態が進行している「福島」である。

南相馬市訪問の一日目（10/11）は現地のボランティアセンターの方の案内で、



昨年はいれなかった福島第一原発2キロ手前まで行くことができた。いたるところに『この先、帰還困難区域につき立ち入り禁止』の看板が立てられ、ゲート前には警備員や警察官が立っていた。車中でも線量計が3.71~3.79mSv(京都の約111倍)の地点もあった。数キロメートル離れるとグンと低い数値になったりもする。放射性物質というのは均質に大気中に拡散しない性質があるということなのか？ 車から降りて辺りの写真を撮ろうとしていると警察官がさっと寄ってきて「どこから来たのか、どういう団体なのか、何の目的なのか？」などと尋ねる。「ここからは立ち入り禁止なので早く立ち去るように」と言わんばかりである。ここで摩擦を生じては次の活動に支障をきたすので引き揚げることとなった。

汚染された田畑が荒涼と広がり、セイタカアワダチソウが木のように一面に生茂っていた。農とともに生きてきた人たちの哀しみ・悔しさ・無念・憤りをすべて飲み込み大地は沈黙していた。昨年と違い、視察する人は私たち以外、一人見当たらなかった。大手メディアも政府の収束宣言以来入っていないと聞く。この「帰還困難区域」に指定されている双葉町から大熊町、富岡町にかけて、不毛の大地と化した広大な田畑が除染作業



富岡町の夜ノ森地区に山積みされているフレコンバック。中身は除染作業で出た放射能に汚染された廃棄物。「黒い林のように」フレコンバックの山、山…。至るところに山積みされている。

で出た膨大な放射性廃棄物の仮置き場になっていた。いたるところから集められた黒いフレコンバック(1t袋)が何層にも積み上げられ、どこまでも続く真っ黒な林となって連なっているのだ。何台もの重機が入り、現在建設中の仮置き場予定地もあちこちに見られた。驚いた

ことに防護服も着ずマスクもせずに作業している人たちが多いのだ。(そう言えば警備員も警察官も普通の制服姿だった。)かなり高線量の所も多いはずなのに…。きっと後になって健康被害が出てくるのではと恐ろしくなった。積み上げられたフレコンバックは劣化して袋が破れ、中から植物の苗が伸びている物もある。2か月前の大雨と洪水で一体、どれくらい



建設中の放射能に汚染された廃棄物の仮置き場(目隠した現場)

の1t袋が流されたのか未だ確認されていない。このまま長期にわたってフレコンバックの山を放置しておけばどうなるのか。今後予定されている広大な山林や田畑の除染などどう考えても不可能だ。除染作業はもはや愚策でしかないと感じてしまう…。(しかし、現地の人たちの前ではこのことは口にはできない。)

最後に福島第二原発の手前の富岡町に建設された焼却施設を見学した。真っ白な巨大な建物である。戸外の放射線量はそう高くはないが0.1mSvで、やはり京都の3倍以上はある。ここでは仮置き場からひっきりなしに持ち込まれる放射性廃棄物(1t袋)を燃やし続けているのだ。その日も2本の煙突から白い煙が立ち上っていた。果たして、放射性廃棄物を焼却してもいいのだろうか？ 国は「焼却炉にはフィルターが取り付けられているから大丈夫」ということにしたいのか。こうしてまた大気中に放射性物質が放出されていくのではないのかと疑いた

くなる。白い焼却施設の壁には『がんばろう 富岡町 環境省 復興庁 鹿島 三菱重工業』と書かれていた。巨額利潤を得てきた原発利益共同体企業が事故を起こし人々を絶望の淵に突き落とし、今また放射性廃棄物の処理事業で大儲けするという構図に沸々と怒りがこみ上げてくる。こんな理不尽なことはもう許せない！

この日、不気味な黒いフレコンバックの延々と続く林と焼却炉の白い煙を見ていると「ああ、私たちは核の戦場跡にいるのかもしれない」と感じた。「やっぱり原発は核兵器工場だったのだ。どうしてもっと早く、このことに気づかなかつたらあつたらあつたら。何十年も前から警鐘を鳴らし続けていた多くの人たちがいたというのに…」と、目の前の惨状に打ちのめされてしまった。知らなかった、知ろうとしなかったことは何と罪深く恐ろしいことだろう！ 自身の無知を恥じながらも、一方でメディアの罪も重いと感じた。「国民の知る権利」は批判的精神を持ったメディアが機能しなければ、私たちは知性と良識を持った主権者となるのが難しいからだ。今、本当に「報道の自由」・「言論の自由」そして「表現の自由」のために声を上げ続けなければ、この国の民主主義を達成することが極めて厳しくなるのでは！と痛切に思う。

その日の午後は「南相馬市復興支援・ウクライナの歌姫・ナターシャ・グジーコンサート」が開かれ、私たちもスタッフとして参加した。幅広い市民の力で大成功を収めた素晴らしいコンサートであった。3・11 以来の再会を喜び合う人たちの姿がロビーのあちこちで見られた。避難指示が解除されているここ、小高地区だが戻って来ている人は少なく、仮設住宅や借り上げ住宅などで暮らしている人がまだまだ多い。住み慣れた故郷を想う人たちは、小高地区で開かれるこのコンサートの日をみんな心待ちにされていたのだ。

若く妖精のように美しいナターシャさんが舞台上に登場されると会場がどよめいた。6歳の時にチェルノブイリ原発事故で被ばくし避難生活で各地を転々とし、14年前から日本で本格的な音楽活動をされている方だ。その美しく透明な歌声とウクライナの民族楽器バンデュエラの哀愁を帯びた響きは私たちを魅了した。ナターシャさんの語りもまた聴く者の心の奥深くに届けられた。「私は日本とウクライナの平和の架け橋となって歌っていきたいのです。…私はあの事故で故郷を失いました。家族を失いました。友達もたくさん亡くなりました。…あの日、何が起こったのか分かりませんでした。3日だけ避難してくれと言われました。3日経っても家に戻れませんでした。1週間経っても戻れませんでした。1カ月経っても戻れませんでした。1年経っても、10年たっても、20年経っても戻れませんでした。そして今も…。」その語りはぴったりと福島の人たちの苦難と重なり、その歌声に魂を揺すぶられ、みんな静かに涙した。

翌二日目（10/12）の午前中には南相馬市の小高（牛越仮設の人たちも参加）、原町、鹿島地区の人たちとの交流会が持たれた。女性団体（新婦人）が中心になって計画してくださった。地域の「9条の会」、「生業を返せ、地域を返せ」福島原発補償裁判を闘っている男性数人の参加もあった。前日のコンサートの余韻と成功裏に終えることができた喜びから、会は明るい雰囲気ではじめられた。一人ひとり、温もりのある相馬弁（東北弁かな？）で話し出された。しかし、その内容は重く厳しいものであった。

「あの時から家族がバラバラになってしまっただけね……。息子たち夫婦は子ども（孫）が一人立ちしたら帰るとは言うけどね。でも、もう、新しい所での生活が根付いているからねえ」、「あれ以来、孫（3歳）や娘は1回帰って来ただけでね。安全だよと、会津米を送っても食べてくれないし、野菜ももう送ってくれるなって言うの」、「やっと一緒に暮らせるようになっても家族の心がすれちがってしまって、みんな内面に辛いものを抱えてるんです」、「この間に、自死した人が3人もいてね。」、「主人が病気だったので避難できなくてね。あの時、避難所

にいないと食べ物も配られなくてね。物資の支給も人参3本っていうこともあって、この先どうなるんだろうって…」、「うちは牛がいたから避難できなくて」、「あれ！うちは10頭の牛を置いて避難したけど、餌をやりに帰れなくなってしまって。牛はみんな無残な死骸になってたんだ。牛の骨を役所のいう場所に埋めたんだけど、後になって近くの井戸水から放射能が出て、周りの人たちから責められて辛かったよ…」。。。。。

すべてを失い心に深い傷を負いながら、必死で走り続けてきたこの4年半を語って下さった人たち。話しながらある方がふと「あれえ、私、今初めてあの時のこと喋ってるよ！今まで、こんなこと誰にも喋らなかったよ」、「私ね、昨日のコンサートで泣けて泣けてね…。でも、私、泣いてもいいんだよね」とご自分の心を柔らかく聞いてくださった。その時、“私は人間として今、大切なものをいただいている！”という感動を覚えた。“今日、こうしてこの場で聞かせてもらったことを私の一生の宝物にしよう！”と心に刻んだひと時だった。

3・11のあの日から自分のこと、家族のことより周りの人たちへの援助に力を尽くし、泣くことも許されなかった人たち。悲痛な思いを閉じ込めてきた人たちが今、こうして語って下さっている。さらなる経済的困難とともに今、夫婦や親子間などの家族関係の難しさに直面されている方の何と多いことか…。地域の崩壊から、高齢者の孤立も深刻である。形ばかりの復興から置き去りにされた孤独感、疎外感に傷ついている人もきっと多いはずだ。経済的にも厳しい日々を生きなければならない人たち。そんな過酷な中だからこそ、今後ますます、お互いが安心して語り合い、つながり合える場が必要とされるのではないかと思う。本当に辛いこと、惨めなこと、自らの尊厳を深く傷つけられたことはなかなか話せない。言葉にするには長い時間と安心して話せる人（場）が必要なのだ。私は、この日、一人ひとりの話を聞かせてもらう中で、『原発（事故）とは一体何か』という問題の核心にかすかではあるが触れられた感覚を持った。これは、究極の「平和的生存権」・「個人の尊厳」全否定に尽きるのではないかという思いがしきりにする。

「福島に再びの春は巡ってくるのか？」、私の心のどこかには「もう、再びの春は取り戻せないのでは…」という哀しみや憤りや無念さがある。国や東電を決して許すことはできない。遅すぎる出発ではあっても自分の出来ることをやっといこうと秘かに決意した。

司会の女性が「私たち、時には泣きながら、また美しいものに触れながら、笑いながら、これからの長い道のりを一緒に歩いていきましょう」と会を締めくくられた。そうなのだ！ここに集っている人たちは絶望なんてされていないのだ！「再びの春」を切望しながらも、それを超えて人間の尊厳をかけた闘いをすでに始めておられるのだ。今まで誰も経験したことがない複雑で困難を極める道を選ばれた！私には、「広島・長崎」の被爆者が命をかけて切り拓いてこられた核廃絶の道とつながっているように思える。そして今、立憲主義、民主主義、平和主義を取り戻す国民的な大きなうねりの中に「福島」も私たちも共に在るのだと思う。

帰路につく日、車窓から安達太良山の稜線が望めた。“太古の昔から悠然と会津の地に座るこの山は人間のこの営みをどう見ているのだろうか”と思いつつ南相馬に別れを告げた。

- 置き去りにするしかなかった牛たちの 骨を埋めたる土地に帰れず
- 牛置いて避難した日の無念さを 初めて言えたと語る人あり
- 安達太良は裾野ひろげて大らかに 嘆きを超えて会津を抱く
- 安達太良も裏磐梯もみなやさしい 福島の人を懐に抱きて

(2015/11/5)